

さ　　だ　　ひろ　　みち  
笹　　田　　博　　通

学位の種類　　博士(教育学)

学位記番号　　教　　第 89 号

学位授与年月日　平成10年6月17日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文題目　ハイデガーと超越の教育学

論文審査委員　(主査)

教授 増 潤 幸 男

教授 沼 田 裕 之

助教授 加 藤 守 通

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ハイデガーの哲学の基盤を超越概念に見出すことによって、有限な自由自在としての人間が自己生成する行為を、日常的な自己存在から本来的な自己存在への超越運動の中で生起する、存在の思惟に基づく存在の真理へ至るための自己形成作用として論拠づけて、教育学に超越概念を取り込む新たな教育哲学を構想しようとする。自己生成という自己存在自身における超越は、新たな自己の創造を可能にする根拠、いわば存在的前提をなしていることが解明され、その前提を世界・他者・自然との関連性から具体化することを目標にしている。そこで本論文は、人間形成論の問題領域をハイデガーの名著『存在と時間』を中心として展開しつつ、先行研究と論者自身の対決を踏まえ、西田哲学に至り着く独創的な教育哲学の構築を試みている。その内容と展開は以下の通りである。

本論文の目的と視点を呈示する序論「ハイデガーと教育学の接点」では、ハイデガーの哲学の本質とそれの教育学に示唆する内容が述べられ、ハイデガーの初期と後期の思想的変遷が近代形而上学の超克の問題として解明される。教育学の立場からは後期ハイデガーの存在の意惟を根拠にするTh. バラウフの解釈を取り上げ、世界内存在としての人間存在の超越問題から存在と人間の本質的関連性を引き出すことによって、人間が自己生成する教育の地平としての存在自体の構

造を解明する。そこでは教育の課題は人間を教育の地平に呼び出すことであるとされるが、存在自体は存在者を現出せしめる、自らはその背後に隠れているものであるがゆえに、直接的な事象として呼び出すことは不可能であることが解明される。次いで第一章「有限的自由—自己生成の構造」で超越教育学の問題設定を、有限的自由としての人間存在の運動、有限性の中での自己生成の構造が明かにされる。ここではハイデガーの超越概念と教育の関係が自由への覚醒を実現する教育の在り方として指示され、存在者の内で自己を喪失した人間を存在の真理に呼び出す中で他者との関係が可能になることが論述される。第二章「世界と人間—自己生成の場所」では、自己生成としての超越が場所、とりわけ世界との関係に持ち込まれることによって、教育的世界の構造が成立する実在的地平を考察している。後期のハイデガーが到達した存在と世界の根源的同一性をめぐって、世界から存在を探求する方向性は存在自身において世界を捉える方向へと転換したことが示される。そこには世界概念の特性として世界存在を根柢で支配している無が開示されていく道筋が延べられる。第三章「自己と他者—共同存在の問題」は、教育活動の基本構造である自—他関係を共同存在の問題として捉え、この問題に関するハイデガーの論究から日常的出会いを越えて本来的関係へと超出することの意義が解明される。M. ブーバー、J. サルトルのハイデガー批判を踏まえ、さらにトイニッセンの見解を取り込みつつ、論者は本来的な自—他関係が存在と人間との邂逅に基づく必要があることを唱え、脱自においてこそ他者との出会いが成就される可能性を見出している。第四章「根源的自然—自己生成の基底」は教育の根柢に関わる問題として、自然ないし存在の世界が自己生成の基底になり得るかどうかを問うている。ハイデガーでは自然な存在の真理として理解されているが、それは存在を隠している自然であり、その限りで無基底としての自然であることから、論者は自然ないし存在の世界が自己生成を究極的に根柢づける隠された基底であると推論する。

第五章「超越教育学—人間性への問い」は、本論文の核心をなす結論的考察の部分であり、新しい教育学つまり超越教育学が成立するための観点として、教育を支える世界とそれへの人間の関わりが人間性の実現をめぐって存在論的に追求される。ここではバラウフの論述に依拠しながら、人間性への教育が存在者であることにおいてのみ可能であることは、教育を根柢で成立させる存在自体からすれば挫折する可能性を常に孕んでいるとの理解に立って、存在の意味への問いと共にこの教育の実現可能性が見出されると確認している。それは教育の可能性と限界性とのアポリアをどのようにして克服するかが問われ、自己と他者の関係成立の世界を存在そのものに求める不可避性が指示される。こうした文脈に沿って終章「人間形成の始源を尋ねて」は、超越教育学の課題として残された問題、すなわち東洋的思惟においてハイデガーの哲学を取り込む道として西田哲学の場所的論理と思惟に言及し、その文脈において自然と教育のダイナミックな関係性の内で人間形成の理論的起源が見出されることを解明しようとする。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、ハイデガーの哲学から読み取れる教育学的思考の構造を解明する意欲的研究であり、教育哲学の哲学とも言うべき性格をもっている。教育学が成立する理論的根拠を究明するのが教育哲学の使命であるとするならば、本論文はその理論的根拠自体が可能となるメタ・理論の論究に他ならない。それは存在の思惟の構造解明という形面上学的課題に取り組んだハイデガーの哲学から、教育を含む諸現象が存在するようになる意味成立の最究極の論理構成を引き出す試みである。論者はハイデガーの哲学と教育哲学とが、日常的自己から本来的自己へと自己生成していく際の時間的・空間的制約を、存在的にではなくて存在論的に、現存在の實在的問いを主題化する時に接合することを明かにする。この現存在から實在への転回を超越行為と受け止めることによって、有限と無限の相即性つまり現在と未来の相互交人の構造、自己生成を支える自由と自然の構造、共同存在としての自己と他者の関係性の構造、という諸点から取り上げて超越の教育学を試みた本論文は、これまでの教育哲学にはない創造的研究である。いわゆるハイデガーの教育哲学研究はドイツにおいても数点しかなく、我が国では一例のみである。本論文が関連学界に与える影響および貢献は極めて大きいと言える。

さらに本論文の特徴は、論者が人間形成の成立基盤に据えたハイデガーの世界理解を、自己生成の生起する西田哲学の場の論理と比較しつつ、両者の類同性に言及していることである。西田哲学に教育哲学の手掛かりを求める研究は皆無ではないが、ハイデガーの哲学と対応させてその可能領域を広げた点は見逃せない。全体として新しい教育哲学を構築する密度の高い研究と言える。それでもなお、教育的行為が教師と生徒の人間関係において展開される具体的活動である以上、この活動の個別性・具体性を括弧に入れて、活動成立の根拠を論理性のみで取り扱うことには限界もある。教育学における超越の問題は、絶対的論拠を求めることから、学びの主体が軽視されてしまう危険があるからである。こうした問題点があるとは言え、教育への過大な信頼が寄せられている現代、人為的作用の極限における挫折の不可避性と、その自覚の中で開かれてくる教育成立の可能性を示唆する本論文の意義が損なわれることはない。

以上のことから、本研究は我が国における教育哲学研究に新たな視座をもたらすところが大きいと評価できる。

よって、博士（教育学）の学位を授与するに相当と認める。